

評伝 矢内原忠雄 (四)

A Critical Biography of YANAIHARA Tadao (Part 4)

関口 安義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

第四章 生と死

一 内村ルツ子の死

矢内原忠雄は一高二年生の秋、一九二一(明治四四)年十月一日に、内村鑑三の聖書研究会に入門、その後、「柏会」にも入会した。このことは前章の「三 内村鑑三門に入る」で詳しく述べたところだ。会は内村鑑三の住む東京新宿柏木の今井館で開かれていた。今井館とは、大阪の実業家今井樟太郎の遺志に基づき、鑑三に献じられた建物で、当時は柏木の内村邸の一角にあった。そこには一高生や一高出身の東大生が多く集まっていた。「柏会」とは、ここに集

まる人々の会を指した。忠雄の先輩に当たる人々には、鶴見祐輔・前田多聞・藤井武・塚本虎二・黒崎幸吉・川西實三・三谷隆正・戸辰雄・澤田廉三・高木八尺・江原萬里・田中耕太郎らがあり、後輩には金沢常雄がいた。忠雄が正式に柏会に加入するのは、この年十二月二日のことである。

忠雄の当日の日記には、「六時半より信さん、常雄さん、大野、大原両君と共に神田実ちやん処へ出て行く、柏会によせてもらふためなり。柏会の方々も多く大学を出られたるにより今度我々をも加へて第二の柏会を開かれし也。黒木、三谷、川西、高木、膳、樋口、佐藤伝次郎氏等。感話あり。極めて真面目なる会にて感情緊張せり」とある。以後、忠雄は柏会の新人として、会員で運営する読書会をも盛り上げていくことになる。なお、内村鑑三を慕う人々には柏会のほか、南原繁や坂田祐・松本実三・石田三治・高谷道男など

を中心とした白雨会はくうという名のグループも生まれたが、こちらには忠雄は入っていない。

内村鑑三の聖書講義は嚴肅で熱烈なものであった。また、信仰や祈りには徹底したものがあつた。この頃、鑑三の娘ルツ子は病んでいた。この年十二月二十三日、土曜日の忠雄の日記を見ると、娘の病に關しての鑑三の態度が記されている。参考までに引用しよう。

今夜の事余は大概を記さんのみ、否 detail はとても記し得ざる也。

始め merry supper たりしも後には too grievous なりき。内村先生始め諸氏のお話あり。殊に禁酒につきての実験談あり、塚本さんの涙を揮つての誓あり、九時一まつ会散ず。stone を囲みて第二次会あり、先生の御息女の御事などより病氣に關すること終に祈りに關することにつきお話あり。「み心にかなふならばこの病をいやさしめ給へ」と祈る。その上は万事み心にあるなれば祈りの心冷淡になる也。人は迷信と笑ふやも知れねど、祈りが聞かるゝことを確信するにあらずんば信仰なき也。もし子の病のいえん事も祈求するにわがためこの世のためならばもう駄目なり、これによりて神の榮のあらはれ世に愛と義との榮えんために祈るならば神様は悪しと見たまふ事決してあるべからず。わが祈りは「み心に召すならば」にあらずして「是非」といふ事になる也、而してわが信仰あらば必ずやこの祈りの聞かるべきを信ず。(先生巨軀を伸ばし背伸し右手を高くあげて天井を指す。その間二三寸、曰く) 丁度かくの如く、も一息きといふ処にて信仰たらざるが如き感す。余の今最も諸君に

求むるは、皆が信仰は不完全ならん、そは致し方なしとしても全人格を掲げてわがために祈りくれ、ばその united force を以てわが祈りは聞かれ手は天井にとどき、病もいゆべし、——かくの如くにして、遂に一週一度まじめなる祈り会をせんとする人ば提出せられ、明日は講義は休みなれども、真に熱心ある人は来て祈禱会をして貰ひたし。但し、すこしにても自分が進みて力をそへんとの熱心あるを要す。自分もいつてそのおかげにあづからうなどと却つて重荷になる如き人は来てもらひたくない。——

先生は賛成者を挙手にとはれたり。余の手もいつしか上り居れり、人の手も多く上り居たり、先生の顔厳として森嚴の氣 Holiness に漂ふ。あゝわれも手をあげたり、然れども活潑にはあらざりき。寧ろ無意識的なりき。事やよし大いによし、あゝされど——余は「重荷」たるものなるを如何せん。

祈りに關する二三の会話あり。ある人その妹につきて暗示療法(?)の反応をのべて祈りのとどく実例かと話されしに對し先生嚴として曰はるゝ様、この区別は明にせざるべからず、なるほどその療法とやらも反応ありてなほるかもしれず、又岡田の静座法の如きもその効果は疑ふべからず、しかれども余等はわれらの神エホバにいやして貰ひたき也。この事は娘の方が早く気がつきたり、実は余も岡田を招きたるものなるが、娘はなんなものになほして貰ひたくはない、神様になほして頂きたいといひしにより余は大いに恥ぢる次第也。なほることは外でもなほらん、たゞ肉のなほると共に靈の健かとなるはわれらの神エホバの外には求むべからず、エリヤの雨をふらしたると、他

の人々が降らせたるとは大変な違ひなり、聖書にもせ預言者多く出でてふしぎなる業を行ふとあり、云々。

内村鑑三という偉大な信仰者の風貌と信仰が、伝わってくるかのようだ。人は「み心にかなふならばこの病をいやさしめ給へ」と祈るが、師内村鑑三は「祈りが聞かるゝことを確信するにあらずんば信仰なき也」と言う。また「わが祈りは「み心に召すならば」にあらずして「是非」といふ事になる也、而してわが信仰あらば必ずやこの祈りの聞かるべきを信ず」とも言い、「(先生巨軀を伸ばし背伸し右手を高くあげて天井を指す。その間二三寸、曰く) 丁度かくの如く、も一息きといふ処にて信仰たらざるが如き感す」のところなど、師の風貌、挙措を捉えて圧巻である。これを正宗白鳥風に言うならば、「多感多情の内村が天を仰いで哭泣す」と言つたところか。引用の後半部分に出て来る「岡田の静座法」とは、アメリカ帰りの岡田虎次郎が創始した自然療法である。それは当時評判の療法であった。一種独特の呼吸法による療法は、坪内逍遙や田中正造までも捉えていたという。一高で忠雄と同期の藤岡蔵六(文科)は、この岡田式静座法によつて、脊椎の病を癒している。

鑑三は、「岡田の静座法の如きもその効果は疑ふべからず」とは言いながらも、「しかれども余等はわれらの神エホバにいやして貰ひたき也」と言つたという。さらに鑑三の鑑三たるところは、「実は余も岡田を招きたるものなるが、娘はあんなものになほして貰ひたくはない、神様になほして頂きたいといひしにより余は大いに恥ぢる次第也」と率直に述べるところである。忠雄は内村鑑三の氣迫に圧倒される思いであつた。この日の日記には、解散後「本郷通り

をふるへながら辿りつゝ、われは——ああえ耐へざりき。見よわが信仰は零なり、われは寧ろ裏切りのユダたるやもはかられず。思へば何よりもなくキリストのみ教をきくに至りてよく漸く一年、もとより何程の熱心もあらざりしならめど、青年会の野辺の祈りの事など今にして思へば隔世の感なきを得ず、あゝわれに信なし、——悲しきことこれより大なるはなし、われは居りてよきや否やわからざりき。われは生きてをりてよきやが解らざりき。余は余の身をいづこに置かんかと思ひき。余は余の身のうすき煙となりてぼんやり薄れ行くを見たり。余は空虚なる余が、活動仕掛の玩具の如く動くを見たり、あゝ我れ果して生くるか」とある。

忠雄は悩んでいた。勝れた師内村鑑三に出会うことによつて、己の卑小さが実感されたのである。この日の日記の終わりに、「吾人は神を父として仰がず、故に祈りに熱誠なきなり、必ずきかるゝとの確信なき也、「是非に」との意氣ごみなき也。——ああ余は駄目なり、死せり死せり、矢内原忠雄は死せり」と書きつけている。自己の卑小さ、駄目さ加減を知るにつけ、彼は聖書を真剣に読むようになる。教会にも出る。日記には「小森様の教会」とか、本郷教会や銀座教会、それに森川町教会の名が記されている。

年が明けて一九二一(明治四五)年となる。忠雄は年末年始を同級で一年生の時、南寮十番で一緒だった洪沢直一の家で過ごした。すでに記したが、洪沢は一年生の時、肺尖カタルで学校を休んだことがあつた。その時、忠雄は丁寧な便りを書いて、彼を励ました。内村鑑三の『基督信徒のなぐさめ』を贈つてもいい。洪沢は忠雄の友情に謝し、故郷の群馬県太田町(現、太田市)の実家で年を越すようにと誘つたのである。忠雄は暮れの二十八日、浅草発十時四十分

の東武電車に乗り、午後一時四十五分太田駅に着く。日記には「洪沢君兄弟四人して出迎へ下さる」とある。太田は関東平野北部に位置する群馬県南東部の町である。南は利根川、北東には渡良瀬川が流れる。忠雄は平和な洪沢家の人々の歓待を受け、「試験の疲労もいづこへやら」の気分、読書にも励んだ。ヘッケル (Ernst Heinrich Haeckel) の *Riddle of Universe* などである。太田には新年の七日まで滞在した。「十日間の家庭生活は余にとりては寧ろ休息の時弛緩の時なりき、われは小兒と共に愉快に遊びぬ」と日記に書きつけている。「小兒」とは洪沢直一の二人の弟、義治と徳治をさす。

帰京して間もない一月十二日午前一時過ぎ、内村鑑三の娘、ルツ子が亡くなった。矢内原伊作は「これは忠雄にとつて生涯忘れることのできない大きな事件であった」と書く。翌日十三日、今井館で告別式が行なわれ、遺体は雑司ヶ谷墓地に葬られた。「千歳の岩よ、わが身を囲め」の讚美歌(現、二六〇番)が歌われる中、ルツ子の棺は墓の中に下ろされた。忠雄は日記にそのことをしつかりと書き留めたばかりか、生涯に亘ってしばしばその折りの印象を回想している。まずは全集第二十八巻収録の当時の日記から見てみよう。

果然寮生活は多事なりき、余の精神生活は忽ちにして大なる刺戟を受けぬ。その第一は内村路得子嬢の召されし事なり。事あまりに厳肅にしてその当時不活澁なりし余の精神はこれに順応すること十分なる能はざりき。然れどもこれ最も厳肅なることなり。余の四十五年(注、明治四十五年)の精神生活はここを以て始まりぬ。十二日午前一時すぎルツ子嬢召さる。十三日

(土) その葬儀あり。余も席末に待す。嬢や年十九、將に開かんとせし梅の花、春を待たで散りしこそうたてけり。然れども内村先生はかくは述べられざりし也。先生は曰く、嬢も幸にキリストがわかりたれば此の世の御用も終りたりと見え主に召されたるなり、若し此の世にありたらば結婚の年頃にして随分苦勞ありしならんも神は特に路得子をあはれみてこれを天に召し給へり、今のあつまりは葬ひの式にあらざりて天国へ嫁入りする式なりと。あゝ然れども——余は喜びの涙か、悲の涙か、これを知らずただ熱涙の滂沱たるを覚えしのみ。ただ涙のみ、涙のみ、その当座余は涙より外に考ふる余地なかりき。柏木より送りて雑司ヶ谷の墓地に至り会衆の讚美歌の中に棺は墓の中に沈み行く、先生先づ土塊を投じて曰ひ給ふ様「万歳万歳」と。あゝ何の涙ぞしかく滂沱たる！ 雑司ヶ谷、空青く木立しげれる中に、「花散り失せては」の歌の煽々たる中を静かに棺は下り行く。万歳と呼ばれし先生は笑を湛へられしも、あゝその御顔はおとろへ御姿は疲れて如何ばかりかの御奮闘ぞや。あゝ感慨無量。更にルツ子嬢の信仰を聞けば吾人誠に冷汗背を沾すを覚ゆ。聞く昨秋病を得てより今に至る迄その奮闘は実に見事なりしと。医師は匙を投じたれども父子は決して失望せられざりき。先生の御祈や如何ばかりなりしやらん、ルツ子嬢はただエホバによりて癒されんことを冀へりしといふ。あゝされど病遂に畢るや今まで生きながらへ御両親への御報恩と言ひ居たる嬢も「それでは参ります」とかく言ひて以後は極めて平和なりしといふ。呼吸切迫するや夜半一時枕頭に集る親子兄弟、最後の晚餐式は行はれしと聞く。かくてルツ子嬢は感謝、感謝の声次第

にうすれ行きて遂にかの国に召されしといふ。あゝ、美しき最後かな、先生は曰く彼女は確かに召されたる也、吾人の祈りの聞かれざりしは却つて神の愛の大なるを示すもの也。神はわが願ふよりも更に大なる恵みを備へ給ふ、神は常に愛なりと。此の父といひ此の子といひわが精神に与へし力幾何ぞや、実にルツ子嬢の召されしは意味なき事にあらざりけり、神はルツ子嬢を以て余を励まされたり、わが胸は破られたり、たゞつとめざるべからず、あゝ、雑司ヶ谷畔の先生！この印象いかで消えむや。

矢内原忠雄は内村ルツ子の死とその葬儀を深く心に留めた。娘ルツ子の死に対する鑑三の真剣な態度に圧倒される。忠雄は後年に至つても、その時受けた「印象」を、何度も文章に書き残すこととなる。「先生の涙」⁴「内村鑑三」⁵「続余の尊敬する人物」⁶などに見られるそれらの文章は、現在すべて『矢内原忠雄全集』で読むことが出来る。矢内原忠雄は内村鑑三の信仰から来る真剣な生活態度にいたく打たれ、自らの信仰を固めていくことになる。一月十五日の柏会では、先輩石川鉄雄の前年暮れに亡くなった妻イチ子に関する証を聞く。忠雄は日記に「石川鉄雄兄の実験談を聞くに及びてわが胸は愈一種の靈感にせまられたり。神はわれをいましめ給ふこと切なり。石川様の Frau は生まれしばかりの嬰子をあとにし昨冬の末天に召されしなるぞや。悲しきことはなし、たゞ祈のみわがかてなりと石川兄のいはれしは永久に忘るるを得ざる所なり」と書いていく。以後、日記にはしばしば印象的だった石川鉄雄の証のことが記される。

内村ルツ子が死んだ十五日後の一九二二（明治四五）年一月二十七日、忠雄は満十九歳の誕生日を迎えた。この日の日記に忠雄は、「今を去る十九年の昔われは始めて此の世の光を見しなり。爾来幾春秋われはかくして生れかくして生きやがてかくして死するならん、思へば平凡の一生かな。あゝ、今日は余が第十九回の誕生日なり。人生十九、多少の感慨なしとせず」と書きつけている。

同年二月二日の弁論部大会で、矢内原忠雄は井口孝親・稲垣長五郎とともに第十四代委員となる。「あゝ、われは弁論部の委員にはあらず弁論部の下僕たるなり。われは神によれる大なる僕たらん、われは僕となりて（ああ感謝）神の愛をあらはさん」と当日の日記にはある。暗れがましい弁論部委員としての忠雄は、練習会を盛り上げ、講演会の準備に余念がなかった。彼は何事にも熱心で、誠実であつた。「余は真理の宣伝を以て天職と心得」（日記一九二二・二・八）との文面も見出すことができる。

二 母と親友の死

この年一九二二（明治四五・大正元）年は、彼の近くにいた人の死が続く。内村ルツ子の死に続いて、二月三日、一高の人気教師の福岡博が、咽喉の癌で死ぬ。福岡は岩元禎とともに一高のドイツ語教育を引っ張った教師であつた。福岡博は森鷗外の小説「二人の友」（『アルス』一九一五・六）の下君のモデルである。芥川龍之介にも鷗外の向こうを張って書いた同名の「二人の友」（『橄欖樹校友会雑誌第三号紀年』一九二六・二）がある。小柄で金縁の眼鏡をかけ、長い口

髭をはやした福間博は、意思の強い勉強家で、授業にも熱心に当たった。彼はユーモアを解し、学生に人気があった。文科の芥川龍之介や久米正雄や井川恭は、福間の授業を好んだ。それゆえ、福間が病氣と知るや、芥川と井川は亡くなる少し前の一月二十五日、入院先の本郷の永楽病院（東大附属病院）に見舞いに行っているほどである。井川恭の日記「向陵記」に、見舞いに行った感想が記されている。衰え果てて冗談も言わない福間博を見舞い、肅然とした様子が記されている。

二月五日に行われた福間博の葬儀は、現役教師の葬儀でもあり、一高は午前十時で授業を打ち切り、生徒が葬儀に出席しやすい環境を講じている。忠雄の当日の日記には、「福間教授逝去につき午前十時限授業終り十一時半参集、生徒一同会葬して浅草今戸称福寺まで至る。いたいけなる二嬢の焼香せられたる時は思はず涙数行。道師の説教ありて帰る」とある。人の死は、若き矢内原忠雄の身近に常にあった。

ルツ子を失った内村鑑三のその後も、「忠雄日記」はしっかりと書きとどめている。二月十一日（紀元節）の日記には、「式には参列せず、柏木の先生の処へ行く。つ子様御葬儀以来始めてなり。先生御疲労は大分恢復せられし様なれども心的の御苦痛推察にあまりあるべし。／われわれは、物見人にかこまれて馳せ場をめぐる選手の如きものにてキリスト、パウロ、ピーター、すべての人が自分の競走に非常のinterestを以て応援して居られる、といふが如きお話なりき」とあるのを見出す。また、同月十三日の日記には、「夜六時より柏木先生の御宅にてルツ子様記念（二ヶ月）茶話会あり、不肖等もその席末に侍するの榮を得たり、先生はまるで人種が別の様

な気がす。わが身のくだらなきこと！」との感想が見られる。

次は最愛の母の死である。忠雄の母、矢内原松枝（マツエ）は三月二十二日、午前七時、四十歳の若さでこの世を去った。日記には「明治四十五年三月二十一日午後十時半母危篤ノ電報」とあるが、翌日には召されていたことになる。矢内原伊作は『矢内原忠雄伝』で、「松江は心臓脚氣を病み、数年来健康がすぐれなかった」と書き、「三月になってからちよつとした風邪がこじれ、死に至つたとす。忠雄は電報を受け取ると、すぐ帰国すると返電し、翌早朝、午前八時半新橋発の急行に乗ったものの、臨終には間に合わなかつた。二十三日の午前十時、今治の町を経、松木に着き、母の遺体と対面した。安らかな死に顔であつた。その日は、ほとんど眠らず。翌日が葬儀であつた。午後二時、棺は松木の家を出、小高い丘にある丸小山墓所に葬られた。すみれやれんげ草が咲き乱れ、鶯の声が聞こえ、海も見える眺望のよい墓所である。

母の死は忠雄にとつて堪え難いものがあつた。まさに「慟哭三日三晩」、ようやく落ち着きを取り戻す。四月四日の日記には、以下のような文面を見出すことができる。

母よ、逝きませる母よ、谷間の百合と咲きて無言のまゝ、に行きたまひし母よ。母は未だイエスを伝へられざりき、然れどもかのやすらげなきがらを去れるたましひの滅びに落つべしとは思はれず。母は心の祈りをあらはすべき言葉なかりしならん、母は祈りの形式を知らざりしならん、母は言葉を知らざりしならん。あゝ、然れども母よ、愛深き母よ、谷間の百合よ、無言の寂滅よ、神が君を召したまひしなり、君は神の国に行かせ

られたるなり。あゝ母よ、四十年の憂多かりし生涯をさりて眠りたる母よ、余等の学業の成るをも待たで逝きたまへる母よ。

母は知らずして神を感じ、神は母を知りたまへり、母の今後のすまひは常世の光ならん。あゝ母よ、あゝ貴き犠牲哉。イエスの死せし時弟子は如何になげきしぞ、而してイエスの逝き給ひしは彼等に取りてよかりしなり。イエス甦りて神の恵みはいよ／＼深かりき、彼等は生前よりも一層イエスを愛せり。彼等は師を失ひてより一層堅き友愛に入りたり、彼等は一旦死してよみがへるイエスと靈的交際に入れり。風の吹くが如く靈なるイエスと絶えず友なる事によりて力を得たりき、弟子より見て悲しと思ひしも神の大なる恵みなりしなり。あゝ母死して余等のなげきは如何ばかりぞ。然れどもイエスの死がその弟子達によりし如くわれらの為にも母の逝きしは母の居るよりも善きことなりしなるべし、実に生前よりも一層母の愛は身にしみて覚えき。血気の身体とはかはりて純粹なる愛の靈との交際は恰も到る処に風吹くが如く常^{じょう}任^{にん}坐^ざ臥^がわれらと絶えず、母は死して更に大いに生きし也。母の身眠りて其の愛純化せられぬ。母の欠点(罪)は滅びてたゞその長所のみ残りり。

母の死はここに純化される。十九歳の青年矢内原忠雄は、母の死を通して、いっそうその信仰を堅くする。内村ルツ子の死に対して、その父鑑三のとった態度、また柏会の先輩石川鉄雄が妻イチ子の死に関しての証言は、忠雄の母の死に対しての処方にも影響した。彼は深い悲しみの中で、真剣に主イエス・キリストを思った。そしてキリストに出会うのである。その体験を彼は、「私は如何にして基

督信者となつたか」⁽⁸⁾に書いている。引用しよう。

同じ年の三月に私の母は死にました。折柄の学期試験を中途にして急行列車もどかしく郷里に帰りましたが、間に合ひませんでした。無限の悲しみが私を包みました。夕方田舎の一本道を何処迄ともなく歩いて居ました。其の時ふと目の前に立つ人に危く衝突しさうでありましたので、驚いて立ち止まり目を見上げますと、イエス様が羔羊^{おひつじ}を肩に抱いてじつと私を見て居られます。そして「泣くな我なり」と言はれたやうに思ひました。私は踵^{かかと}をめぐらし心慰められて家に帰りました。先に内村先生がルツ子さんの召されたことにより、抗争し難き体験上の事実として天国の希望を教へられて居ましたので、今母の死に際しましても天国は一点の疑問もなく私の慰めとなつたのであります。

これは忠雄の信仰告白以外の何物でもない。彼は母の死を通して、その信仰を確立したのである。

忠雄にとって母の死後の心配事は、家の問題であつた。父と祖母は健在ながら年をとつていた。兄安昌は、転校した今治中学校を卒業し、岡山の第六高等学校に在籍していたものの、休学を申請していた。しかも、母の死にも駆けつけることもなかつた。安昌は忠雄と異なり、勉学は好きな方ではなく、家族への思いもうすく、大家族の矢内原家を背負う自覚も気概にも、当時は欠けていた。忠雄の心配事は、一に母亡き後の矢内原家にあつた。四月十日の日記に彼は、「今日は母が三七日なり。本学期休学に決する兄は先日來岡山

にありしが今日帰れり。あゝ愛は懼おそれをのぞく、我をして罪を責めしむる勿れ、我をして權威あるものの如く傲慢たらしむるなかれ、共になかしめよ愛せしめよ主によりて、母によりて、あゝ兄よ、愛のみ愛のみ。」と書きつけている。

兄安昌は忠雄からすると、ダメ人間ではあったが、家を継ぐ長男である。母亡き後の矢内原家を思うと、兄安昌に立場を自覚してもらいたかった。が、忠雄は兄の罪を責めることがないように、また、矢内原家で自分が權威ある者のように振る舞うことがないようにと祈っている。忠雄は実に謙虚である。しかし、現実には、祖母とよは七十歳を越え、父謙一は六十歳を越える。妹悦子は未だ女学校に在籍し、下には未だ幼い千代と啓太郎がいた。心配事は山積し、彼は神に祈らざるを得なかったのである。日記によれば、忠雄は母の死後二十一日目の三七日の行事を四月十日に済ますと、翌四月十一日、郷里今治を発ち、一高の寄宿寮に戻った。東寮十六番の仲間、同情の眼をもつて彼を迎えた。以後彼は、学業はむろんのこと、弁論部委員や基督教青年会の委員としての仕事にも誠実に当たるようになる。

一ヶ月後の五月十一日、この日は一高と早稲田の野球の試合があった日であるが、忠雄は東京諸大学の連合演説会のため、三田の慶應義塾に行き「第一義の人」と題した演説をした。当日の日記には、「午后慶應の聯合演説会にひとりで出かく。一千の校友はすべて早稲田との野球試合に赴けり。会衆少くして五時に演説終る。余は〈第一義の人〉と題し、horizontal, verticalの説、〈先づ神の国とそなただしきとを求むる〉ことに就て二十五分許り述べたり」とある。

この演説は、現在『矢内原忠雄全集』第二十七巻に収録されているので、簡単に目を通すことができる。初出は雑誌『雄弁』第三巻第九号(一九二二・九)である。矢内原伊作はこの演説に對し、「人間は社会的存在として水平的(ホライズタル)に生きる者であると共に、この社会的生活を真に意味あらしめるためには宗教的に天に向う垂直的(バーティカル)な面をもたなければならず、これこそ第一義のことであり、「此の第一義の立場に立つて初めて水平的現実の事業は出来る」「吾々の最も努むべきは此の義人たる生涯に入ることである」ことを主張した堂々たるものである。矢内原忠雄の後年の思想の骨子はすでにここに確立されていると言つてよい」とまで言う。確かに矢内原忠雄は、早熟の理論家・思想家であったのだ。

この年(一九二二)七月十八日から八月二日まで、忠雄は一高興風会が企画主催した中国東北部(満洲)および朝鮮への旅に参加した。参加者二十四名、中には一高基督教青年会で一緒の石田三治もいた。石田は旅の感想を「大連まで」と題して書いており、彼の歿後、『大学評論』(第四巻第三号、一九二〇・三)に載つた。この旅は「満鮮旅行」と呼ばれた。忠雄はこの旅行のことを「満洲の旅」と題して、郷里の新聞『愛媛新報』に断続して(一九一三・八・九)一〇・二二二十七回にわたって連載した。この紀行文に、石田三治は、I君の名で出てくる。

地方新聞とはいえ自分の文章が活字となつて載るといふのは、晴れがましいことであつたらう。当時の一高生で筆の立つものは、出身地の新聞によく作品を載せていた。一年生の時、同じ南寮十番の仲間であつた井川恭(恒藤恭)などは、故郷松江の新聞『松陽新報』

や『山陰新聞』の常連だった。「赤城の山つゝ」として『松陽新報』に五回にわたって連載された(一九一三・七・一六、一七、一九、二二、二三)ものは、四人の仲間、——文科の芥川龍之介・藤岡蔵六・長崎太郎、それに井川恭の卒業記念旅行の記事である。忠雄の場合も、その文筆の能力が評価されての掲載であった。『矢内原忠雄全集』には、「満鮮旅行」に関するものとして、この「満洲の旅」(第二十七卷)と『満洲日々新聞』に寄稿した「感想の種々」(高健児の満洲観(三)) (第二十九卷)が収録されている。

「満洲の旅」は、四百字詰原稿用紙にして約九十六枚にもおよび紀行文である。嘉義丸に乗って神戸港を出発、瀬戸内海を航行し、門司を経て大連に第一歩を踏み、以後帰国までの日々が詳しく記される。芥川龍之介が後年一九二二(大正一〇)年三月末に門司港から上海に向かった時は、玄界灘で大揺れに会い、「食卓の上の皿、ナイフなど皆ころげ落ちる始末故小生もすつかり船に酔ひ少からず閉口しました」(小沢忠兵衛・小穴隆一宛、一九二二・三・二九推定)という状況であったが、忠雄が玄界灘を通過したのは、盛夏の季節で、「海の穏かな事は五六百噸の汽船で瀬戸内を航すると同様」というコンディションであった。忠雄は「荒い玄海は冬でなければ見られないさうだ」と書いている。が、濃霧のため、上陸にはひまどつた。旅行は大連にはじまり、旅順・南山・営口・遼陽・長春・哈爾濱^{ハルビン}を見学し、朝鮮半島を縦断して帰国した。

中国東北部、いわゆる満洲は、当時日本が植民地化をねらっていた地である。矢内原忠雄が一高に入学した年、一九一〇(明治四三)年に日本は李朝末期の大韓帝国を併合し、勢力をさらに北に伸ばそうとして、この地に熱い視線を送っていたのである。善きにしる悪

しきにしる関心の高まっていた地であった。一高の先輩もこの地には沢山いたようで、それら先輩の配慮が至れり尽くせりの旅であった。先輩の多くは南満洲鉄道株式会社、いわゆる満鉄と略称された半官半民の国策会社に勤めていた。満鉄は鉄道のほか、撫順炭坑・鞍山製鋼所を拠点に交通・鉱工業・商業・拓殖など、多角経営で知られた。大連到着早々一行は港の内外見物に出かけるが、「満鉄の人が二三人説明して下さつた」と旅行記にはある。特に山田という名の先輩がよく面倒を見てくれたという。

大連では金子雪斎という泰東日報社の主筆を訪ねる。金子雪斎は、一般には国粹主義者として知られていた。彼は漢学者でもあり、中国語による新聞『泰東日報』を刊行し、中国人の眼でも立論するという気骨ある人物であった。雪斎は一八六四(元治元)年生まれなので、当時四十八歳であった。ちなみに『雪斎遺稿』(振東学社、一九三三・八)があることも書き添えておこう。忠雄は「雪斎先生」と書き、初対面の様子を「此の日は僅か一時間許りの接見であったが、先生の朴誠なる風貌と醇乎たる言説とは痛く吾等青年の胸に強き人格の響きを伝へた」と書いている。

金子雪斎は中国人に対する日本人の態度、その島国根性を批判し、相手を軽蔑しながらこせこせしては、その信頼を得ることはできないことを指摘した。彼は日本の中国政策を批判する。忠雄はいたく共鳴し、「我等が満洲旅行の首途にあつて此の言を聞くを得たのは何と云ふ幸福だつたらう。僕達は支那人を見に来たのだけれども却つて好く日本人を見た。此の感想は旅行を終る後まで一貫した」と書く。これは一高同期の芥川龍之介が、後年、一九二一(大正一〇)年に大阪毎日新聞社の特派員として中国各地を訪れ、

感じたことと多分に重なる。芥川も中国を旅しながら、かえってよく日本や日本人のことを考えることになるのである。

「満洲の旅」連載の最終回で、忠雄は次のように言う。曰く「我等は支那人を視たよりも一層よく日本人を視た。その正直にして活気ある処はうれしい、その勇敢にして清い感情のあるのは頼もしい、けれども総体的の島国根性、これがわが国民性より脱し去るまでは我々は大国民たるを得ない」と。

やがて植民地化される中国東北部(満洲)に行き、さまざま矛盾や日本人の愚行を見、「弱い、支那人に対しては「ちやんころ／＼」と頭から馬鹿にしてかゝる。此の根性が抜けぬ限り、如何に政府の殖民方針が立派であつても、十分の実が揚らぬ訳である」との認識を、忠雄は大連上陸早々にもつた。「感想の種々一高健児の満洲観(三三)でも、中国人を蔑視する日本人を見て、「余は始めて島国根性の如何なるものやを覺れり」とか、「日本人は島国根性を脱せずんば大事をなし難し」とかの感想を記している。さらにこの小文では、「植民地にありては兎角驕慢奢侈に流れ労働困苦を避け忌むの風あり、従つて淫逸放縱の湿ひなき生活に入り易し、此間に立ちて宗教家諸氏の任重かるべし」とのいかにも忠雄らしい見解を見出すこともできる。

中国に来て日本人の性癖や島国根性を、矢内原忠雄はしっかりと見つめることになる。彼の後年の『殖民及殖民政策』(有斐閣、一九二六・六)や『帝国主義下の台湾』(岩波書店、一九二九・一〇)をはじめとする殖民政策研究シリーズ(現在『矢内原忠雄全集』第一巻〜第五巻収録)の始原は、この旅にあったと言つても過言ではない。このことは後章で改めて考えることにしたい。

ところで、前述のように一高時代の矢内原忠雄は、幾人もの人の死に接しているが、母の死後一年半、一高卒業の年、一九二二(大正十一年)八月十五日の武さんこと、大利武祐おおとしたけすけの死もまた彼に大きな痛手を与えることになる。大利武祐は、忠雄の神戸一中以来の無二の親友である。彼に関しては、すでに第一章の「四 神戸中学校」でふれ、その後も折々その名を出してきた。忠雄は神戸一中五年生の一九〇九(明治四十二年)の秋九月、寄宿していた家の主人、従兄の望月信治が神戸一中から今治中学校に転出したため、神戸での住まいを失うが、その時手を差し伸べたのも大利であった。つまり忠雄は中学校最後の七ヶ月間を大利の家で過ごすことになり、その関係はいっそう深まっていた。大利武祐は高校(旧制)や高専に進学せず、故郷にとどまり、養母とともに家を護る。忠雄はそういう大利武祐に一高進学後は、文通で心を通わせていた。『矢内原忠雄全集』には、遺憾ながらそれらの書簡は見出せないが、「忠雄日記」にはしばしば大利武祐の病状のことが記される。その頃、彼は結核を病んでいたのである。

前にも一部を引用したが、忠雄には「武さん」という追悼記⑩がある。テニソンの詩を巻頭に置き、「武さん!」という呼びかけではじまるこの文章は、四百字詰原稿用紙にして二十八枚、堂々とした追憶記である。はじめの方の一節を、まず紹介しよう。

武さんと言つても多くの人は之を知るまい。彼は大利武祐といふ。六甲山の麓音ヶ平の里、山幽に水清き処、名ある旧家に養はれて、養母とたゞ二人暮しの身であつた。彼と自分とは同じく明治三十八年の春中学へ入つたのである。当時自分は上筒

井に居たから通学の際誘つてくれて自然に二人相携へて学校に往復することになった。(詳しく言へば彼の家から中学へ通つて居た当時二年級の北尾君が、同級の僕の兄を誘ひによられて居たので、従つて彼と自分とも一緒に通学する様になつたのである。) かやうな次第で入学最初の授業の日から二人は通学の友であつた。そして卒業式の日まで然うであつた。併し二人は単なる道伴では終らなかつた。僅か十三の子供に特別な考の有らう筈はないけれども、氣の合ふといふのは妙なもので、自分は深く彼に引きつけられた。殊に二人は天然を楽しむといふ上に於て益、友情を暖くした。摩耶六甲、須磨明石、箕面有馬は之を訪ふこと幾回なるを知らず、或は小豆島の寒霞溪、或は篠山の奥の俗に滑といふ処へも行つた。中でも記憶に残つてるのは、三年級の頃かと思ふが布引の水源を探険するといつて、時は秋の盛であつた、尾花の風に靡く野、油菊の脛を没する徑、流を涉り木を伝つて、遂に六甲山の氷を取る池に出た時である。実に我々の楽しみはこの遠足に越すものはなかつた。快活な少年の心が暖いそして清い天然の中に結ばれて思ひのまゝに笑つたり走つたり、野の花の栄の歌を歌つたり、落日を肩に浴びて峠の上に無言で立つたり、ウォーズウォースの詩を体現したかの如くであつた。

五年級の二学期から都合によつて僕は彼の家に寓することになった。二人はやがて中学を卒業した。彼は高商は嫌つたけれども、自分の好む上の学校へ行きたい念があつた。しかし家には養母一人の事故、家を離れて遊学することは家庭に許し難き事情があつた。彼は長らく考へた結果遂に遊学を断念して谷間の

姫百合の様な一生を送らうと決心した。青春の身にはつらき犠牲である。然し温順なる彼はよく忍んだ。彼は母を安んじ家を鞏くし、子孫をして余沢あらしめんことを期したのであらう。

右の「武さん」という文章には、忠雄の一高入学以降二人が遣り取りした書簡を含み、若き日の矢内原忠雄を考えるのにきわめて貴重なものといえる。そこで以下、この文献によつて、二人のかかわり、——武祐の死に至るまでのことを略記しよう。忠雄が一九一〇(明治四三年)九月、一高入学を許可されて東京へ行くに当たつて、武祐は「わかれては君がよすらん文をもて／われは忍ぶの庵をむすばん」と詠み、忠雄は答えて「君むすぶ庵の屋根に苔むすも／かはらぬものは情なりけり」と詠む。この年十一月、忠雄は武祐から以下のような便りを貰つてゐる。

大分一高の生活にも馴れたらう。又真の味も解つたらう。君が入寮前向陵三年間の生活を前に控へて嚴肅の感にうたれてると言つて来たが、其の嚴肅の感はいつ迄も続きさうかね。實ちゃん(注、川西實三)は大学校に入るとき『成績や略略てふ嫌なもの、職業難などいふ淋しき声が耳に襲つて来る。これに反し高等学校入寮第一に聞く声は何であるか。曰く自治、曰く友情、曰く犠牲精神、曰く人格修養、迫るものは具体的ものにあらず殺風景のものにあらずして抽象的神秘的のものである』と書いて送られた。君に取つても向陵生活は右様に感じられるか。それともまだ君を満足せしむるには欠けた処があるかどうか。僕は一度君の真意が聞きたい。何の必要でない様だ

が君が十分満足し感謝しつゝ、生活して居てくれ、ば僕も嬉しいのだもの。

この手紙を紹介した忠雄は、「自分の喜を以て自身の喜としてくれる彼あるが故に、或は人生に對し、死に對し友情に對して聞いたり感じたりすることを語るのは、同寮同室の友にあらずして実に三百哩を隔つる山間の彼とであつた」と書く。

大利武祐は忠雄が一高生活を本格的にはじめた一九一〇(明治四三年)の冬に、一年志願兵として和歌山市深山の重砲兵聯隊に入隊した。忠雄は翌年の夏、故郷、今治に帰省する際の六月二十五日、日曜日に、入営中の武祐を和歌山市の深山に訪ねている。『矢内原忠雄全集』第二十八巻収録の「忠雄日記」に当日の記事が見られる。「今日は沢山(筆者注、深山の間違いか。和歌山市には沢山という地名はない。校正ミスと思われる)へ武さんを訪問せんとす。難波発車九時四十分、途岸和田を経て山岡君を思ふ。十二時近く和歌山着、人力車にて沢山に行く。一時半頃武さんと途にあひ直に転じて加太(筆者注、和歌山市郊外の海岸景勝地。万葉の時代から行楽地として知られる)に至り共に食して語る。楽しきものなり。六時半武さんを宮門に送り、再び加太に至り、加太神社に詣し、一旅館に投ず、濤声枕をさそふ。武さんは元氣になり居たり」とある。が、傍目には健康に見えた武祐の体は、この頃から苛酷な軍隊生活によって蝕まれていたのである。満期除隊となつて帰宅した時には、重い結核に冒されていた。

「武さん」には、「明治四十四年の）夏自分が深山へ行つて彼と共に半日を送つた時、彼は色黒く肉稍、肥えて今までにない立派な体

格であつた。併し彼は丈こそ高けれ元來丈夫な體質でなかつた故、多分軍隊生活がこたへたのであらう、彼が満期除隊になつて、幾夜兵營の寒夢にみた故山の家に歸つた時は、実に色青く体衰へて氣息奄々たるものであつたと云ふ。その冬休みは帰省しなかつたので、暫く彼に会ふことも出来ないうち、彼の肉体は漸次病の爲めに侵されて行つた。先づ腸を患つて大阪病院へ入つた。呼吸器も侵されさうになつた。自分は、これはどうした事だらう、親一人子一人、而も自身の野心を捨ててこれから親を安んぜんとして居た彼に、かくの如き一方ならぬ病氣のつくとは、と氣が氣でなく、出来るなら自分が代つて苦しんでやりたいと、しみじみ思つた事も一度や二度でない。勿論彼自身も聞えた。彼の家、彼の母を思ひ彼の人生を思ひ、病軀を憐しては如何なる風に考を立つればよいか。何を言うても養ひ子の身である。十幾年養育の恩をうけながら忽ちにして此の病にかゝる、彼の思ひ悩んだのも当然である」とある。

病との闘いは厳しかった。翌一九一一年(明治四五年)五月十五日の日記に忠雄は、「武さん手術後身体旧に復せずと。あゝ涙の尽きぬ世かな。われらは何不足なく真に幸福なる事は此の世に於ては不可能なり、たゞ終りまで忍ぶ者は救はれん、かの国に於ては病む者なく又愛するものと再会し得べし。われらは終まで友たらん、終まで相愛せん、あゝわれらに愛する友ありて相互に祈るを覚え以て慰藉と励みとを得ん」と書く。忠雄は須磨の病院に入院していた武祐をしばしば見舞い、祈りを共にしている。

一高に入つてから矢内原忠雄は、信仰に目覚め、イエスの愛を知るようになっていた。彼は病の床にあるこの神戸一中以来の友人に、キリスト教を紹介しようとし、手紙を書いた。「武さん」には

右の文章に続いて、以下のような文面を見出すことができる。

自分は長い手紙を書いた中に（明治四十五年五月）、イエスを彼に紹介した。自分は高等学校へ入つてからイエスの愛に深く心を引かれて居た。自分は手紙の一節に、「武さん、君に基督教（形式的）をすゝめる事は敢てせぬ。しかしイエスを紹介する。イエスをすゝめる。」

哀む者は幸なり其人は慰を得なければなり。

かく言つたイエスこそ誠に慕しいではないか。君と共にイエスの事を語り得る日が待ち遠い。」

と云つて、新約聖書を読むことを勧め、そして内村先生の『基督教徒のなぐさめ』といふ本を送つた。二人が耶蘇に就て語るの日は六月の末つ方、自分が帰省の途次、須磨の療病院へ彼を訪うたのが始めてであつた。秋上京の際も亦此処を訪うた。二人の交は遂に最も高い処で結ばれた。イエスの愛による友、祈祷によりて交る友、我々の友情は遂に此処に導かれたのである。静かなる夜切に彼の為に祈れる時熱き靈感の彼と我との間に通ずるを覚え直に筆を取つて手紙を彼に書いたことも屢々である。彼も亦平安なる信頼を以て法悦の日を送るに至つた。彼の病は結核性なりしが故に親族故旧の人々も憚つて敢て彼に近づかぬ。併し別段不平を抱くこともなかつたらしい。彼の病はなか／＼治し難き病である。併し自暴自棄の跡は少しも見えぬ。彼は時に人生の果敢なきを感じたであらう。併し彼は神の愛の永遠なるを信じて静に忍んだ。

忠雄は毎月、内村鑑三編集の『聖書之研究』を武祐に送る。長い手紙を添えて。この行為について忠雄は、「武さん」に「自分が雑誌と手紙を祝福してポストに入れるのは此上ない悦であつた」と記し、「彼の手紙も亦少からず自分を感動せしめた。慰めらるゝは却て自分だと、彼の手紙を見るたびに感じた」と言う。

一九一三（大正二年）六月七日、土曜日。大利武祐の命が夏頃までということを知つた忠雄は、一高の大事な最後の試験前なのに、夜八時新橋発の夜間急行列車に乗り、京都大病院に入院中の武祐の見舞いに旅立つ。八日朝、京都着。幸い当日の「忠雄日記」が『矢内原忠雄全集』第二十八巻に収録されているので、全文を引用する。

六月八日 日曜

琵琶湖の朝景色はよかつた。京都へは午前九時十分頃についてすぐに病院へ行つた。室へはいると武さんは淋しい笑みをもらした。うれしいのだらうが、それをうれしくあらはすだけの力がないのである。僕もその言葉なくてたゞその手を取りて顔を見つめた。あゝやせて力なき手。かはつた／＼。武さん！
彼のどが大へんわるくて十分に声が出ない。僕も多く話すことはない。約翰ヨハネ伝十四章よんできかした。いつまでも去りがたくはあつたが、あまり話してはよくないと却て病人から注意されて一時頓辞した。あのお母さんがついて居られるが実にお気の毒であつた。去るにのぞみて僕はひとへに彼の身の上を神に祈つた。今やかれは生くるも死ぬのも神の手にあるのである。
人力はいかんとも出来ない、あゝ武さん！

二時五十六分発車帰京。

忠雄は九日の朝七時二十分に新橋に着いた。とんぼ返りの忙しい旅であった。何せ新幹線などない時代である。夜行列車で京都へ東京間が十四時間余もかかったのである。旅費も馬鹿にならない。しかも、大事な卒業試験の最中であった。が、忠雄はそんなことにかまけていられたなかった。親友が大事だったのである。忠雄の友への献身は尋常でない。

大利武祐は、前述のようにこの年八月十五日に死去した。父の看病で今治に帰郷していた忠雄に、その訃報が届いたのは、二日後の十七日であった。彼はこの日の日記に、「武さん十五日午前二時後の国へ召されたり、移されたりとの報を得、その写真を出し熟視流涕す。彼のために讚美歌「主よみもとに近づかん」等をうたひ且つロマ書第八章をよむ。昨夜の余の祈りは彼の死する前既に主によりて聞かれしなるべし。あゝ彼の細く力なき手足は今やあらず、光りある霊の体彼にあたへらる。あゝ行くものより残るものに別れのうれひや深し、祈せん」と書きつけている。

予期したこととはいえ、忠雄の打撃は大きかった。「武さん」という文章の終わりに、「彼は特に学術が優れたといふのでもない。又特に運動に秀いでて居たわけでもない。奮闘生活の模範にもなれなかつたし苦学力行の handbook にもなれなかつた。いはば平凡な男であつた。彼は家庭の愛を経験すること普通の子に比して甚だ薄かつた、にも拘らず彼は常に養母の事を思つて居た。彼は飽く迄柔和で謙遜であつた。終まで忍ぶ小羊の如くであつた。彼は人には認められずとも神に扱まるべき人であつた。彼は神の愛にも似、兄弟の

愛にまさりて自分(筆者注、忠雄)を愛した」とある。忠雄は若き日の愛する友をここに失つたのである。その遺品もまた失われたことは、この年一九一三(大正二年)十月九日の忠雄の日記に見られる。死病と言われた結核による伝染を怖れて処理されてしまったのである。忠雄のやり切れない気持ちは、日記に記された以下の感懐に、偲ぶことができる。

武さん、君は実に死する時まで寂しき生涯を経たりき。その死後も極めて寂しからん。君の手沢ある遺品は此の世にのこらず、空しく捨て去られぬ。我にありては百万の宝玉も何かせん、たゞ君が病中の遺品こそほしきなれ。思へば我がためにと君が書きおき給ひつる文のはし、われより君にさげし文ども、君に送りし書籍、君が用ひし硯、文藻、筆蹟、書籍、――聖書も、『聖書之研究』も、『所感十年』も、『病間録』も、――あゝその中を開かば処々に君が感想の一端も記され居つらん、朱線も引きてありつらん、あゝそのすべての葬り去られし事の口惜しさよ、貴き君が病中日記すら焼きすてられんとは。心なき人々よ、肉の父も霊の友たり得ざることの情けなさ。君、危篤に陥りたらん時は我に電話をうちくる、こそ近侍のものもの至情なれ。我と君との交情は兄弟にもまされりと彼等の言ひしも口のさきなりしか、君死去の報は死去の後数日にして始めてわが許に知らされぬ。われは君の葬儀にも列しえざりき。

忠雄の胸中の思いが伝わってくる。彼の心は寂しかった。友の死に続いて忠雄を襲つたのは、父矢内原謙一の死であつた。これは後

節に譲ることとした。

三 一高卒業前後

矢内原忠雄の一九一三（大正二年）の春は、慌ただしく過ぎていた。弁論部や基督教青年会での行事には熱心に参加し、東寮十六番の仲間との交流も深まっていた。「東十六」という、部屋で出している回覧雑誌にも、彼は進んで寄稿した。三谷隆信によると、『東十六』という雑誌は、「書きたくなかった者が、何でも、いつでもかいたのである。真面目な感想もあった。仲間に対する注文や批評もあった。旅行記もあったし漫画もあった。この雑誌は大学に入学後もつづいたので、大学卒業のときは三十冊ぐらいあったらうと記憶するが、震災、戦災その他で今は殆んどない。この『東十六』誌には矢内原君も健筆をよく振った一人¹¹ということになる。

三月の試験中には鷗外訳の『即興詩人』を読み、四月の試験休みには、房総方面への旅に出る。同室の石井満の招待を受けての旅であった。四月三日の「忠雄日記」には、「午後の一時半上総湊にいた。石井が来ないかと言って居たから遠慮なくやつて来たのである」とある。石井は後年日本出版協会会長として戦争責任を問われた出版社の整理・肅正を行った人である。彼は書くことを好み、『新渡戸稲造伝』（関谷書店、一九三四・一〇）などの著者としても知られる。彼は前年母を失った忠雄にいたく同情し、その郷里に招いたのであった。忠雄が母危篤の電報を受け取り、急遽帰国する際、新橋駅まで見送りに来てくれたのも石井満であった。石井もまた母を

一高入学以前に亡くしていたのだ。後年忠雄は「石井満君と私¹²」で、この旅を回想し、「母の死は私と石井君を結んだ。その翌年春の休みに、私は石井君をその郷里上総湊の家に訪ねた。当時汽車は木更津までしか行っておらず、私は東京湾汽船で霊岸島を出帆して、湊に上陸した。さみしい港であった。石井君の家に泊めてもらって、二人で鹿野山八十八谷に行ったりした」と回想している。

四月五日からは一人旅で房総半島を南下する。途中「安田、勝山を経て高崎といふ海岸の温泉場の雷館といふに勉強にきてる松本実三、本位田祥男両君を尋ねて」一時間ほど話し合い、夕方、北条の幸田旅館に着く。松本実三は内村鑑三門下で、白雨会メンバーの一人。南原繁や石田三治らと親しかった人である。東大銀時計組で、のち経済学者となるも、早世した。本位田祥男は忠雄の一高・東京帝国大学の一年先輩。のちの経済学者、東大教授。本位田とは珍しい姓だが、吉川英治の新聞小説『宮本武蔵』（朝日新聞）一九三五・八・三三―三九・七一）には、本位田又八なる人物が登場する。このことから、学生からは又八の渾名で呼ばれることになる。一九三七（昭和二）年の矢内原事件では、経済学部長の土方成美と組んで、忠雄の追放を図った人物である。彼は一九三九（昭和一四）年の平賀肅学に反対し、東大教授を辞め、大政翼賛会が成立すると経済政策部長に就任、戦後そのことにより公職追放を受けている。が、若き日の本位田祥男は、勉強家の学生で、策士の面影などなかった。それ故忠雄も、わざわざ訪ねて行ったのであろう。

六日は館山へ行き、「公園の松の木の下で静平な鏡が浦」を見る。その後外房に沿い、房総半島を北上し、鴨川を経、その夜は天津町の井筒屋に泊まる。七日は清澄山へ登り、山を下りて日蓮ゆかりの

「小湊誕生寺の側で昼寝」をする。勝浦へ着いたのは、午後三時頃であった。「海岸の丘の芝生に踞して海原遠く眺むれば氣宇広闊となつた」という。彼は持参したホイットマンの海の詩を「全部幾度となく読んだ」と日記に書きつけている。忠雄は『草の葉』のホイットマンが好きだった。八日は帰途に就く。彼は旅を省みて「聖書（旅中哥林多前書をよむ）と祈りと、而してこれらの源なる神とにあつく感謝した」と記す。大原から十一時半の汽車に乗り、四時前に両国駅に着く。翌日からは『向陵誌』に載せる「弁論部史」に取りかかっている。

同月二十三日、水曜日。各新聞に一高校長新渡戸稲造の免職、後任に文部省視学官の瀬戸虎記が就任したという記事が載る。これは当時の一高生にとつて、衝撃的事件であった。新渡戸は前年秋にアメリカから帰国した後、健康がすぐれず、帰朝歓迎会の席上辞意を漏らしてはいたが、まさかの思いが多くの寮生にはあった。文科の井川恭（恒藤恭）の当日の日記「向陵記」¹⁵には、以下のようにある。

新渡戸校長が免ぜられて、文部視学官瀬戸虎記氏が任命に成つたといふ記事が各新聞に出た。大に憤慨する。学校へ出ると、午后学生大会をひらいて、横暴なる文部当局の責をとふといふ檄が銅像の前に立ててあつた。

午后嚶鳴堂は一杯の人であつた。二、三人の反対者の外、十数人の人々が立つて、校長復職を叫び、採択の結果十五、六人の少数をのぞき満場一致で復職運動をなす事になつた。議長井上君（筆者注、井上庚二郎）の態度は立派であつた。

矢内原忠雄もむろんこの学生大会に出席していた。「忠雄日記」には学生大会の様子を報じ、「新渡戸先生の復職を期する旨を満場にはかれり。十数名壇に立てり。二三の人が先生を校長として不適任なり其他の理由にて復職運動に反対するものありしを以て余も登壇せり。文部省を責むるはみな一なり。遂に委員の決議案を迎ふ。会散じて後石井君と共に新渡戸先生を訪問す」とある。一高時代の矢内原忠雄はとにかく積極的な学生生活を送っていた。彼は頭の回転の早い学生であり、思うことあれば、こうした席でも臆せず手を挙げ、意見を述べる事が出来た。それは神戸一中時代からの彼身に付いた習慣であり、意見を述べるタイミングも巧みであった。しかも、一高弁論部で鍛えた滑舌と声量も申し分なかった。彼は友人付き合ひもよく、仲間からは信頼されていた。が、一方で、何事にも行動的なその態度を、苦々しく思う者がいたのも事実である。文科の芥川龍之介や成瀬正一がそうであった。忠雄のあまりにも目立った行動への拒否反応の顕著な例が、前章で詳しく述べた倉田百三の矢内原批判であった。

臨時総大会で忠雄は、新渡戸事件にかかわる実行委員に選ばれている。四月二十五日の井川恭の日記（『向陵記』）は、新渡戸の辞任に至る成り行きと、学生大会が復職運動を止めたことを、理路整然と述べている。引用しよう。

昨日、寮の委員が文部省を訪うて大臣奥田義人氏及び福原次官と会見した顛末が新聞に出てゐた。

十時前校長の訓示があると云ふので、講堂に集まつた。先生は、なほ事務引つゞきの為であるとて、教授服をきたまゝ、

壇に立たれた。

先生は諄々と説きはじめられた。年十六のとき、明治天皇が先生の家に存在したまひ、一家のもの共に拜謁をたまはつた。その時以来先生は志を立て、一家のため、新国土開拓のため一生尽きむことを決心され、札幌農学校へはいられ、それから米国の大学に三年、ドイツの大学に五年、農学を修められ、帰朝して札幌農学校の教授となられたが、京都法科大学へ木下総長の懇望により、その知遇に感じてうつられた。しかるに又、牧野文相の懇望により、又その知遇に感じて一高の校長となられた。はじめは二年くらゐのつもりであられたのが、とうとう足がけ八年もをられる事になつた。

そのはじめ、文相は、校内の事務をみるにはそれ／＼事務吏あり、校長は更に大なる教育に従つてもらひたいと約束した。しかるにその後、世間にハ、先生が他の事業に心をわかつて、校長の務めに専らで無いといふ批難をはじめた。それから一高の氣風が衰微し墮落したのは、先生の罪であるといひ出すものも出てきた。加ふるに先生が、国家の命を奉じて、米国に交換教授として赴かるゝや、先生の曠職をそしめるものが多く、去年の夏の校長排斥記事が新聞にあらはるゝに及んで先生は憤然として帰られた。そして、第二学期の全寮晚餐会に辭氣激したる演説をされ、且つ文部省に辭表を出された。それで委員はその事をきいて、文部省をとうてその辭表の公式ならざる事、且つ当局はなる可く先生の留任を希望する意思なる事をたしかめ、一方先生に留任を乞うた。先生も健康を害せられ、且つ専門の學問もおくれたため、静養をのぞんでゐられたのであるけれど、

それほどまでに思つて呉れるのならバ、世間の批難も何もかまはずに、みなと一緒にやつて見たいと、思はれた事もあつた。その後先生は、文部省へ辭表き、届を乞はれたが文部省は応じなかつた。メイビー博士と満鮮にゆかるゝまへにも当局の意思をたづねてゆかれた。しかるに今回、先生をよんで相談して、先生の辭表をき、届ける事になつた。

それまでの成りゆきを事理あきらかにのべて、之がまだ職に在る間であつたならばとも角、已に勅許をもつて辭令の出た今日では、我輩は決して復職するやうな事はしない。それでもしゐると云はれるならば、我輩の屍をふんで、当局に迫つてもらいたい。この場合ハ是非おだやかに運動をやめてもらひたいと言はれた。

僕は、たゞ涙が出てしやうがなかつた。

午后、学生大会をひらき、復職運動の廢止を決議した。

五月一日の新旧校長の送迎会のことは、矢内原忠雄が当日の日記に印象を語っている。そこには「此の日はわれらの最もしたひ奉る新渡戸先生を送る日なり。校長より先生を失ふことの惜しさよ。名残をしさよ。とても大学生などの感じうる所にあらず。三時半より嚶鳴堂にて新旧校長の送迎会あり。先生の御話は例によりて実によりき。生徒演説も大抵よかりき」とある。

その夜は食堂で晚餐会があつた。八時半に終え、有志は新渡戸前校長を小石川の自宅まで徒歩で見送ることになる。この日の日記に、忠雄はその模様を記しているが、忠雄の代表あいさつの姿を含めて「永い思ひ出の夜」と小見出しを施して日記（向陵記）に書

いた井川恭のものを、ここでも引用しよう、

有志のものは、先生を先にたてて見送る。大沼(筆者注、大沼淳蔵、一高の体育教師)さんが提灯をもつて先生の横につく。みな先生のそばよりたがって大きはぎ。みなもみ合うて本郷の大通りをゆく。三丁目から春日町へ折れる。雨ははれたが、みちはぬかるんである。

僕たちの心はもう先生を思ふ情ではりきつてゐた。空はくらく、ともしびは、うつくしくかゝやいてゐた。

とうとう小日向台町の、先生のお宅に來た。ドカ／＼と、砂利のしかれた庭にながれいる。かゝやかしいあかるい玄関にハ、うちの人がバラ／＼とかけ出る。先生の奥さんが、にこ／＼してでられる。先生と奥さんとハ、ならんでたゝれる。みなはひざまづいて、送別のうたをうたふ。僕たちの眼にはもう涙がわいてきた。矢内原君が感情に迫つたこゑで、なきながらわかれのあいさつをする。みなもたゞすゝり泣いた。それから先生御夫婦のため黙禱をさゝげ、全寮々歌をうたひ、万歳をとなへて、かへりみつゝなだれ出た。さゝげられた一つはいきた花かご、一つは造花のかご。奥さんがたかく花かごをさゝげて、アイサンクユーフロムマイハーツといはれたときの、その場のありさまのうつくしさは、かつてみた事のないうつくしいものであつた。

新渡戸稲造は、多くの生徒に惜しまれて一高を去つた。新渡戸はまさに名校長の名にふさわしかった。矢内原忠雄や井川恭をはじめ

とする一高生は、よき校長に恵まれたことになる。

忠雄に「一高を去る前に」という文章がある。兵庫県立第一神戸中学校校友会の『会誌』第二十七号(一九三三・六刊行)に載つたもの。同年五月五日の「忠雄日記」に、「中学校への雑誌原稿を書く、新渡戸先生に関して多くかきたり。一日夜のことをも書けり」とあるのが相当する。全文は『矢内原忠雄全集』第二十七巻に収録されている。四百字詰原稿用紙約二十八枚ほどの文章である。後輩たちに一高のこと、なかならず新渡戸稲造校長辞任にまつわることを知らせたいとして書いている。「四月二十五日、先生は生徒一同を集めて辞職の顛末を語られた。多くを言ふまいが、たゞ先生は今の日本官立学校には少し大き過ぎるといふ事と、我等生徒と先生とは互に愛し、互に解し、深き愛着の中に別れたと云ふことを知つて貰ひたい」とあり、まず新渡戸校長の告別演説の大意を記す。次に五月一日の新旧校長の送迎会のこと、その夜、有志で新渡戸を自宅まで送つたこと、自身の涙の別れのあいさつなども書かれる。忠雄は筆の人であつた。三十枚近い文章を巧みに、一気に書き上げる。そして母校の校友会『会誌』に投稿しているのである。

こうした日々の中でも、弁論部や基督教青年会への出席も欠かさない。五月八日の日記には、「練習会は相変わらず盛なり。弁論部興隆時代といふべきか(中略)。七時前よりテモテ教会にて聖潔会、但し常雄さんと二人なり。今日は真に感謝と讚美にあふれ、その祈りは真に神に對せる如くキリストの慈顔仰ぐべく、いつ迄も居りたかりし程よい気持ちになりき」とある。「常雄さん」とは、一級下の金沢常雄のことである。後年金沢は無教会主義のキリスト教伝道者となる。忠雄は内村鑑三の柏木の集会にも休まず出席している。

『向陵誌』の「弁論部史」の初稿と再校にも励んでいる。五月十三日、新渡戸宅に来日中のブラウン大学総長フォーンズ歓迎のお茶の会が開かれ、忠雄はじめ十名ほどが相伴にあずかっている。ブラウン大学は、アメリカロードアイランド州の首都プロビデンスにある名門で、アイヴィー・リーグの一角である。

この頃彼は何かと悩みが多かった。故郷の父は病氣となり、祖母とよは老齢であった。五月十七日の日記に「兄上及悦子より来信。父上御病氣との由驚くの外なり、あゝ、なぜに病にはかゝられ給ひつらん」とある。前節で詳説した中学時代の親友大利武祐の病状が悪化したのも、この頃のことであった。彼はその後一高最後の試験を前に、日程を割いて友を見舞っている。そのことはすでに記した。彼は心中に多くの悩みを抱えていたのだ。そういう忠雄が心おきなく語れる友は、一級下の金沢常雄であった。五月二十一日の日記には、「夕方常雄さんと散歩す。常雄さんは誠にわが友なり、心の友なり。彼と語りてわが心安くわがうれひ散ず」とある。

卒業を前に忠雄の身辺は、慌ただしかった。六月十三日から試験がはじまった。忠雄は日記に「歴史及びウンケルの試験」と簡潔に記す。ウンケルとはドイツ語の教師名である。双方とも学科を越えた試験だったらしい。英文科所属の井川恭の日記（『向陵記』）には、「けふから試験なので、五時すぎおきて、ノートや宿題のしらべたのを一と通り見る」とある。一時間目は西洋史、二時間目はウンケルのドイツ語の試験であった。六月十六日は「国語の試験」があったが、この日忠雄は『校友会雑誌』六月号（第二七号）を学校から貰い、倉田百三の例の「生活批評―矢内原忠雄君にあたふ」という論文を読む。この件は、すでに第三章の「四 倉田百三の批判に込え

る」でとりあげた。

一高は卒業試験を終えると、退寮しなければならず、六月十七日に漢文の試験と、最後のラテン語を、出席を取るだけで終えた忠雄は、以後、代々木の植木屋堀江峯次郎宅に下宿する。六月二十日は川西實三から東京帝国大学の政治学科と法律学科の違いの話を聞く。その日の日記に彼は、「どちらでもよき様で少しもきまらず、余は今の志望は内村先生又は新渡戸先生の如くに日本の精神的向上を少しでも助けたきにて、官吏又は会社員となりて立ちて行く腕もあらざるべく望みもなし。かくの如き志望にして法律と政治といづれの学科がよかるべきか。政治の方は雑駁なりとするもゼネラル・カルチャーの利あり。法律の方は一本道なれど頭脳をつくる利あり。未だいづれを取るか決せず」と書く。結局彼は、東京帝国大学法科大学の政治学科へ進学することになる。

一九一三（大正二年）七月一日、矢内原忠雄は第一高等学校英法科を首席で卒業する。彼は三二名の卒業生総代として答辞を読む。当日の日記には、「卒業試験余は首席なりき。思ふに一年の時よりのを平均したるが故か、格別どころかすこしも嬉しくなし寧ろ暗然たるのみ。しかしよく／＼己を空しくして考ふれば神の恵、親の恩、師友の恵みなればこそ卒業もしたれ、やはり大なる感謝なり」とある。なお、忠雄には卒業を前にして課題作文として書いた「三年の回顧」¹⁵と題した一文もある。一高卒業後は読書の日々を送る。七月十五日に大学の入学試験があった。日記によると「問題は英文和訳二題、和文英訳二題、監督は美濃部博士」とある。美濃部博士とは、のち「天皇機関説」を右翼の学者箕田胸喜や軍部から排撃され、貴族院議員を辞任した美濃部達吉である。

東京での仕事をこなし、彼は、十五日の夜十一時新橋発の夜行列車で、故郷に旅立つ。途中御殿場に下車し、富士登山を敢行した。御殿場口から登り、吉田口を下った。頂上を極めたのは、七月十七日のことである。当日の日記には「日出、所謂ご来迎を拝す。清新の気溢る、されどその荘重落日に及ばず、いづれも白雲諸山を覆ひて海の如し」と記している。

四 大学進学と父の死

一九一三(大正二)年九月、矢内原忠雄は東京帝国大学法科大学政治学科に入学した。一高一年生の時南寮十番で一緒だった井川恭(恒藤恭)や、一高基督教青年会で共に聖書を学び、祈りを合わせた長崎太郎は、京都帝国大学法科大学政治学科に進学している。当時東京帝国大学法科大学は、高校からの進学者は法科出身者に限り、文科からの進学を認めなかったからである。当時の東京帝国大学法科大学には、法律学科・政治学科・経済学科の三学科があった。忠雄が政治学科を選んだのは、「雨の安息日」¹⁶⁾という彼の文章が参考になる。一九一四(大正三)年十一月十五日の記録である。入学後一年余を経ての感想である。以下がその文章である。

経済科は幼稚、政治科は雑駁、しつかりして居るのは法律科のみとは、よく聞く語であるが、法律は学問が古いだけ一番整つて居ることは確かである。しかし僕の方針を決定せしむるに与つて力あつたのは一高時代の、而も終り頃の、新渡戸先生の

日本の財政に関する御演説であつた。僕は日本の財政の為に貢獻したいと思つて始め経済科を志望した。しかし其学科がいかにもつまらなさうであつたから政治科へ転じた。法律科へ転じなかつたのは一つは法律を食はず嫌ひであつたのであるけれども一つはやはり日本の財政の為めなる当初の志望を留保しておいたからである。——ああ併し財政のこと、金勘定することは僕の最もうるさいと思ふところであつたのだ。

僕は将来どんな仕事につくか知らない。今は格別就きたいと思ふものもない。併し恐らく神は適當なものを、僕の負担し得る範囲に於て与へ給ふであらう。ただ世のものとならず、神のものとして、神の印を額に印されしピルグリムとして暮して行かう。学問にまれ実務にまれ要は神の真理を闡明するを以てわが任務と心得る。我にも亦為しうるのサービスの有るあらば恐くはわれ自身の自覚せざる処に於て神の恵により効果を収めるであらう。

当時の東京帝国大学の総長は、山川健次郎であつた。山川は旧会津藩士。ロシア、次いでアメリカに留学し、イエール大学で物理学を学ぶ。東京帝大ののち、九州帝国大学や京都帝国大学の総長を歴任し、日本の大学教育の確立に尽力した人物である。

大学入学前後の矢内原忠雄最大の事件は、父謙一の死であつた。父はこの年五月の半ば頃から体調優れず、病床にあつた。先に引用した父の病を知らせる便りを忠雄が受け取つたのは、五月十七日のことである。当初病は神経痛という診断であつた。父謙一は、妻松枝の死後、再婚していた。謙一にとっては第三の妻となる女性、忠

雄にとつては第二の母ということになる。戸籍には入れずじまいであったこの女性の名は、判明しない。彼女は矢内原家に馴染むことができず、四ヶ月ほど去ってしまう。

忠雄は父謙一に、生涯尊敬の念をもつて接していた。人は思春期に反抗期の期間があり、父に背き、対抗するものである。が、忠雄は十一歳の時から父の許を離れ、神戸の従兄望月信治宅で過ごし、父との接触は休みの期間だけであった。そのためか父は理解ある存在、家の中心にいて家族を抱擁してくれる存在として眺めることが多かった。早くして親元を離れての生活は、父母を慕うことになり。彼の母への思いは、なまなかのものではなかったが、父への思いも同様に深かった。忠雄における父と子の関係は、父に反抗し、父を乗り越えようとする一般の人々とは大分異なる。彼は心から父を慕い、父の存在を偉大なものとし、是認した。それだけに父の病状をいたく心配したのである。大学入学前の休みの日々、彼は故郷で父謙一の看病に全力を尽くしている。忠雄は稀にみる親孝行の息子であった。当時の「忠雄日記」には、「午前父に侍す、父病むこと既に七十日、神よ願くは我にその苦みを代り負はしめ玉へ」(一九三・八・五)、「此頃父の傍に侍すること多し、その痛み殊に甚し」(一九三・八・一八)などである。父の余命は、いくばくもないことはわかっていた。それだけに忠雄は父の看病に、全力を捧げたのであった。

彼にはまた、父亡き後の矢内原家が心配であった。兄のこと、第二の母のこと、まさに「家庭の事を思ひて悶々す」(日記一九三・八・一六)の状況であった。すでに記したことながら、兄安昌は忠雄と違って意思が弱かった。神戸中学校は欠席多く、留年(藩第)が

決まった時点で今治中学校に転校、岡山の第六高等学校に合格できたのはよいものの、ここも欠席勝ちで休学に追い込まれていた。父が病氣だというのに家にも戻らない。父の看病を語った十八日の「忠雄日記」には、続けて以下のようにある。「安兄の消息に就ては其後杳として不明なりしが今日良さんより住吉へ来たる葉がきにより東京にて別れし事わかりしより、兄上はひとり東京に止まりしこと判明しこゝに大なる心配起りぬ」とある。幸い安昌は、その日帰宅したが、頼りのないことは相変わらずであった。

第二の母は、矢内原家の風習を嫌い、家を出たり入ったりであった。気丈な祖母は「いんでおくれ」と叱りとばす始末。こうした中で忠雄は、友人に手紙を書き、東寮十六番の回覧雑誌『悠々』のために執筆している(日記一九三・八・二二)。八月二十四日の「忠雄日記」には、内村鑑三の *How I became a Christian* を読み終えるると一文が書き込まれている。鑑三は苦境の中における忠雄の師表であった。

父矢内原謙一は、今治病院で肋間神経の剔出手術をすることになったものの、病は急変し、手術は取りやめとなる。症状は見るに堪えないほどだった。忠雄の歎きは大きかった。八月二十八日の日記には、「足腰も立たで大小便も出でで加ふるに疼痛厳甚、ああ義しきものかゝる病に臥す、誰かなげかざらんや、あゝこれ何等の病ぞ」とある。三十一日の日記には、「父胸部緊絞性の厳痛を覚え咳痰つまりて其の苦痛見るにしのびず、終日介抱す。夜文姉様来られ実にうれしかりき。父も甚だ喜べり」とある。文姉様とは、謙一の妾、千賀子との間に出来た娘文代のことである。こうした中で、六高を中退した兄安昌が、九月五日急遽結婚する。周りの人々が腰の

落ち着かない安昌を慮つての処置であつた。相手は遠い親戚の娘、富山益子であつた。当日の「忠雄日記」には、「本日早朝四時といふに日吉伯父と新妻マス子氏と来車す(中略)。嫂来りてわれは実にくれしさに溢る也。心大いに軽くなれり。願くは兄がもつと引きしまりて家事を取締まり嫂と琴瑟相和して世を終らんこと切願にたへず」とある。前述のように、忠雄は父亡き後の家が心配だったのである。

彼は東京帝国大学入学の手續きを先輩の川西實三に手紙で依頼した。授業はもうはじまつている。父は自分のことはいいから、上京せよと言う。忠雄もそれに従いたかつた。九月十四日の日記には、「われ上京したくてたまらぬ心あり。父の病はどうせ久しき也。今やさしたる悪兆も見えず。むしろ早く上京せんにはと、之を音兄様(注、姉文代の夫野間音一)にはかる。即ち賛せられて之を父上に乞ひて下さる。父もまた、遅かれ早かれ行かねばならぬ也。われ死するも学は素より廢すべからざる也、よし行け、明後日行け、と。われ黙して涙す」とある。

前述のように神戸一中時代の親友大利武祐が死去したのは、父の介護中の八月十五日のことであつた。そして父矢内原謙一が世を去るのは、十月一日である。忠雄は大学への出席が気になり、父の勧めや伯父たちの賛同もあつて、九月三十日に今治港から出発したものの、神戸港で「チケケサシスグカヘレヘン」の電報を、十月一日の夕刻受け取る。忠雄はすぐに引き返し、翌日十月二日午前十時今治に着き、父の死顔と対面した。「わが親ながら気高き人なりしを、あゝ、〜」と忠雄は当日の日記に書きつける。

思えば矢内原忠雄は、過去二年、何人もの人々との死別を体験し

てきた。内村鑑三の娘ルツ子、ドイツ語の師福岡博、母松枝、親友大利武祐、そして父謙一である。死は絶えず若き彼の周りにあつた。特に父の死は、二ヶ月余傍らにいて、介護に尽くしただけに重く、厳しいものがあつた。死とは何かに彼は思いを馳せる。死の対極には生があつた。今後いかに生きるべきか。彼は聖書に真剣に向き合い、故郷の拝志川の流れのほとりを歩んでは、神に祈つた。家族伝道のこととも真剣に考えている。彼は故郷にあつて、上京したくてたまらぬ心を抑えて父を看病した。父は忠雄に「われ死するも学は素より廢すべからざる也」と言い含めていた。忠雄はそうした父の思いを胸に刻むにつけ、「あゝ、我は学にはげまざるべからず。如何なること起るとも学を廢することなかるべし。われは学に大成せざるべからず」と先に引用した日記(一九一三・九・一四)に続けて書き付けることとなる。

父の病を前に、忠雄は苦慮する。「我は誠実遙かに父に及ばず人格遙かに父よりひくし。たゞ我は基督を知りエホバを知るが故に、祈るべき対象と祈るべき事とを知るが故にわれは怖れずして父の為に祈る。仏前の祈り、神前の祈りの多き中にありてわれは独りエホバ全能の神愛の神唯一の神に祈る」との記事(一九一三・九・二〇)を見出すこともできる。彼は矢内原の家を心配する。父の死を前に、「今わが家父を失うて何等の光ある。今われ父を失ひて何等の愛ある。神よわれは罪なり、われは我家にキリストを伝ふる能はざりき。神よ我を罰せよ、さりながら父と家族に、母を失ひし弟妹に願くは大なる苦痛を加へしめ給ふ勿れ」との悲痛な思いを、彼は日記(一九一三・九・二七)に吐露している。

- 注1 正宗白鳥「内村鑑三―如何に生くべきか―」『社会』一九四九年四月一日～五月一日、のち『正宗白鳥全集』第二五卷、福武書店収録。一九八四年六月三〇日。二〇九～二六一ページ
- 2 藤岡蔵六『父と子』私家版、一九八一年九月（日付なし）。一四八～一四九ページ
- 3 矢内原伊作『矢内原忠雄伝』みすず書房、一九九八年七月二三日。二〇一ページ
- 4 矢内原忠雄「先生の涙」『通信』5号、一九三三年五月、「追想集内村鑑三先生」一九三四年五月所収、のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。四四六～四四八ページ
- 5 矢内原忠雄「内村鑑三」『わが師を語る』社会思想研究会出版部所収、一九五三年二月、のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。四八七～五〇九ページ
- 6 矢内原忠雄「続余の尊敬する人物」岩波書店、一九四九年二月五日、のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。二九七～三二四ページ
- 7 注3に同じ。二〇一ページ
- 8 矢内原忠雄「私は如何にして基督信者となつたか」『通信』18号、一九三四年六月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一四二～一四三ページ
- 9 注3に同じ。二〇八ページ
- 10 矢内原忠雄「武さん」兵庫県立第一神戸中学校校友会『会誌』第二二号、一九一三年三月一日、のち『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。二七三～二八七ページ
- 11 三谷隆信「向陵の三年」南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日。四五ページ
- 12 矢内原忠雄「石井満君と私」『日本鉄道創設史話』推薦のことは「銀杏のおちば」東京大学出版会、一九五三年一月二〇日、のち『矢内原忠雄全集』第二五巻収録。一六～一八ページ
- 13 「向陵記」は井川恭の一高時代の日記。現在大阪市立大学恒藤記念室蔵。なお、大阪市立大学からは大学史資料室編で、『向陵記』恒藤恭一高時代の日記」が、二〇〇三年三月三十一日付で翻刻出版されている。
- 14 芥川龍之介の井川恭宛書簡（一九一四・三・二二付）の一節に、「この頃は太へん DISILLUSIONがついてこまる。紀年祭の事で矢内原君と三度あつたらすつかり矢内原君が嫌になつてしまつた」とある。また、成瀬正一の一九一三年六月二八日の日記には、倉田百三の矢内原批判にかかわる感想、「今月の校友会雑誌は例号より有能だ。倉田の生活批評は痛快極まる文章で、私の嫌な矢内原に大打撃を与えてる」を見出すことができる。
- 15 矢内原忠雄「三年の回顧」『感想集』収録。『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。四二九～四三六ページ。本巻の巻末「編集後記」には、「著者は、明治四十五年三月（第一高等学校二年）から、大正六年三月（東京帝国大学三年）まで、日記とは別に和綴墨書の感想集七冊を残している。ここには各冊の形を残し、著者の付した題のもとにその大部分を収録した」とある。日記同様の目にふれることを予想したものではない。
- 16 矢内原忠雄「雨の安息日」『感想集』収録。『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。四八八～四九一ページ